

# 農業共済新聞

**NOSAI**  
 全国農業共済協会  
 〒102-8411  
 東京都千代田区一番町19番地  
 電話 ☎ 03-3263-8413  
 編集 ☎ 03-3263-6727  
 月4回・水曜日発行  
 ©全国農業共済協会2017  
<http://www.nosai.or.jp/>

## 都市農業 消費者をフアンに

野菜約40品目 富澤 剛さん 東京都三鷹市

東京都三鷹市 都会の住宅街約1kmでキュウリやトマト、江戸時代から作り続けられてきた「江戸・東京野菜」の「のらぼう菜」などの野菜約40品目を通年出荷する富澤剛さん(43)は、都市農業が長期にわたって継続されるよう、地域の消費者と積極的に接点を持つことでファンづくりに努めている。公共の利益を優先し、都市計画に基づく道路取用に際して農地の一部が削られることも真摯に受け入れた。事業承継時に発生する相続税が高額になりがちなることを憂慮しつつも、生活が便利な代わりに農業には条件が良いとは限らない環境で前向きに取り組んでいる。

富澤さんは就農以来、野菜ソムリエ講座に参加するなど新しいことにチャレンジしてきた。そうして得た人脈から仕事の幅が広がり、生産者仲間とともに市内の学校給食への通年安定供給を実現。江戸・東京野菜の一つ「内藤ごうがらし」の普及・振興活動では採種を担当し、グループで3千鉢出荷する苗の半分を手掛けるなど、先頭に立って励んでいる。

「都市農業の醍醐味は、消費者との距離が近いこと。学校給食に提供するようになって児童



## 食育や景観向上へ貢献

### 必要性を積極的に発信

必要には、生産者自身が公益性や必要性を発信し、消費者の理解を得続けなければならないと富澤さんは考えている。農地の道路取用に応じたのも、そうした姿勢の表れからだ。一方で、自治体や市民グループが地元農家を応援してくれるようになり、少し前までは「都市部に農地はいらない」だった世論が明らかに変わったといえる。「消費者と実際にふれあうことで、ようやく理解・応援し



マンションなどに囲まれた畑でのらぼう菜を収穫する富澤さん

変わってきたらといつて、あぐらかいてはいけない」と気を引き締める。

大学構内の落ち葉腐葉土の原料に

地域の関わりを大切にして



富澤さんは、取り組みの一つとして、所属する地域のJAを通じて近くの大学と連携する。同市内にキャンパスがある国際基督教大学から落ち葉を引き取り、腐葉土を作るほか、府中市の東京農工大学馬術部からは年間10トンの馬ふんを引き取り、自家製堆肥にして

今後の目標は、東京での農業が当たり前の存在になることだ。という。「われわれの野菜を食べたり、農業体験を申し込んだり、農業者を仕事に選んでくれるといい。急がず、長い目で農業ファンを増やしていきたい」。それが富澤さんの願いだ。

### 記者席

都市農業を支える一歩

●都市部で農業をする意味は、どこにあるのか？ 農業との接点がある人にとつては、当たり前のように、都市農業の公益性や必要性を積極的に発信し、消費者との接点づくりに耐え、風雨に打たれ、病虫害と闘い、近隣住民への気遣いを絶えず求められる。地価が高いうちに農地を手放せば、それらすべてから解放され、まとまったお金も手に入るのに――そう思う人は少なからずいる。農業は大変だ」というイメージを持っているからだろう。そんな中で、生産者としてあり、言葉を交わすことで、熱烈なファンに交身する人もいる。作り手の顔が見えることが安心感

堂」への食材無償提供といった奉仕活動にも力を入れる。

東京・神田の「東京オープン」オーナー・渡辺真祐さんは、周囲への配慮に努める富澤さんの姿勢に共感した一人だ。店舗入タツフとともに畑作業を約2カ月に一度手伝うなど、関係を深めてきた。「自身の経営の枠を超え、三鷹市の農業や地域のことを第一に考えている。われわれのお客を彼に紹介できるくらい信頼しているし、今後の活躍にも期待している」と話す。

相続税の負担重く

地域農業の応援団を着実に増やしている富澤さんは「農地にかかる相続税の高さが解消されれば、都市農業はもっと盛り上がるはず」と強調する。所属するJA青壮年部の副部長を務め、担い手が安心して農業を続けられる環境づくりにも努めている。